

- 絶対に正確である。
- 27 Ulrich Lins : La dangera lingvo (『危険な言語』) 1973, L'omnibuso, Kioto.
- 28 Ulrich Lins : Esperanto dum la Tria Regno (『第三帝国におけるエスペラント』) Senacieca Revuo, SAT, 1968, Paris.
- 29 数年前日本を訪れたハンス・マルテンスという労働者は、この国際旅団の参加者であって、その経験を語ってくれた。ドイツ共産党員としてスペインで戦ったこの人は、その後スエーデンに亡命して社会民主黨員になっている。
- 30 SAT : Historio de SAT (『サートの歴史』) 1953, Paris.



W. R. I. の機関誌『ラ・ミリトレジスタント』(1936年)

第八章 自由主義者も相ついで

ニッポン語はかならずしもひとつのことではない。
わたしのある種の思想はある種のニッポン人にもみ通ず
る。エスベラントの喜びは、これを学ぶと同時にこのこ
とばの通じる相手を見いだし得ることにある。

イシガ・オサム

ピンクも白もねらわれて……

一九三八年七月二十一日未明、ある物音にわたしは暗黒のなかで眼をひらいた——と松葉菊延は思
い出している——舞鶴憲兵隊に下宿先で寝こみをおそわれる憲兵七人がかりの大捕物であった。

松葉は古いエスベラント。勤務先の浦賀ドックから舞鶴の海軍工廠へ出張中の事件である。当
局の嫌疑は、松葉は共産党員である、国際政治スパイである、日本海軍の秘密図面を外国へ送ったと
いうことであった。同じ容疑で、かれは一九三一年にも一度横須賀署にひっばられていた。

連日の取調べ。当時秘密書類が紛失したことがあったのかどうかは、すこぶる疑問であるが、松葉
が地下の共産党に参加するような男でもなく、また政治的謀略のできるような身分でもないことはす
ぐにわかったので、最後の部分に焦点が合わされていった。エスベラントで、平和主義者、自由
主義者で、諸外国と文通している。これだけで十分である。あとは、ひっばってきて、ひっばたい
みれば、ホコリぐらい出るだろうということで、あらゆる私有物がひっくりかえされ、手紙、日記の
たぐいが押収された。

松葉の日記からのちの大阪外大教授川崎直一の名が出てきた。松葉や戦後、文部省関係のエライ人
になった後述の野島安太郎の場合は「赤」ではなくても「ピンク」ぐらいのことはあっても、川崎と
きては、まったくの「白」である。

川崎は当時「おやしからずこし財産をわけてもらって、どこにもつとめず、ブラブラくらしていた。……夏のある朝早く、おもてのベルがなった。でてみると、わたしのすまいに近い住吉署の刑事が『友だちをつれてきましたので……』』という。京都から一人の刑事がきていた。『たずねたいことがあるので、京都まできてほしい』という。そして、わたしは京都の五条署の留置場にいられた⁽²⁾」

野島の場合は少し違った。キッカケになったのが、松葉の日記だけとは断定しかねる。実はそれ以前にも、ある古いエスペラントが野島たちのやっていたエスペラント雑誌のことをある地方新聞に投書して、「この非常時にあんな自由主義的なものを出さしている当局の気がしれない」と文壇にもあったような悪質の挑発事件があったからだ。野島は、戦後社会党に属していた古いエスペラント中野原脩司が京都で発行経営していたエスペラント新聞「*Tenpo*」の編集者であった。この雑誌はプロ・エス運動潰滅後に出していたマトモなもの一つで、当時京大大学院にいた武谷三男が「自然科学と論理学」という論文を書き、友人の服部亨に翻訳させてそのデビュー作としたのが、この『テンポ』であった。(この論文は、『弁証法の諸問題』という武谷の本の中にエスペラント文のまま収録されているから、気のむく人は読むがいい) 服部はさらに「真赤な赤」の島木健作の小説集『獄』を翻訳し、はじめの部分をこの雑誌にのせ、のちに単行本として中原のカニヤ書店から発行している。野島その人も、芥川の『河童』や武者小路の『人間万歳』などの間にまぎれて徳永直の『技師阿波忠助』を発表している。野島の前任者の服部の時代には、河合栄治郎・美濃部達吉・岡邦雄・三木清などの論文が紹介されていた。

赤退治の次がピンク征伐であることは、古今東西を通じての定石であった。知らぬは野島と中原だ

け。ふたりはしばらく「ある高級ホテル⁽³⁾」のごやっかいにならねばならなかった。一九三七年四月にサート創立者のランティが来日したとき、大部分のエスペラントがさわらぬ神にたたりなしで近寄ろうとしなかったにもかかわらず、公然と歓迎会をやり、インタビュー記事を出した人たちだから、当然の結果とも言えるだろう。

松葉によると、かれの日記から浮かび上がったもうひとつの名がある。だれでもない、斉藤秀一その人だ。斉藤については前章で述べたが、かれの検挙はこの年の十一月であるから、まず松葉は安心してよいのではないか。それとも官憲はしばらくの間、斉藤の周辺を調べていたのだろうか。川崎のケースを考えると、まずは別個のケースであらうか。

憲兵隊、警察のネライはずれた。もしもこれらの被疑者の中に前歴者がおれば、あるいは、せめてものことに、家宅捜索からマルクス主義関係の文献でもあげることができていたら、……かれらは共産党との関連はツメのアカほども持たなかったし、人民戦線というコトバも新聞紙上で見たぐらいのことであった。

川崎は二〇日間で釈放された。「君たちのやっていることは、なにがなんだか見当がつかん。いちおう君は家へ帰ったらよろしい」と刑事は語ったが、「なにがなんだか見当がつかん」方は川崎であった。松葉は四三日間、憲兵隊の留置場において「なんの結末もなく釈放になった」。野島は陸軍刑法でおどしつけられたが、結局起訴猶予になった。しかし事件の後遺症は残った。『テンポ』はついに廃刊に追いこまれ、松葉はこれ以後敗戦までエスペラントから遠ざかってしまった。そしてそれ以上に、かれらの周辺に与えたショックは大きかった。『テンポ』の同人のひとりはいま広島にいるが、

「エスベラント自身はいいが、どうも運動の方は」と、事実上エスベラントから足を洗って、戦後三〇年の今日もその態度をくずさない。そしてこれこそが当局のネライであったのかもしれない。

ホキ徳田の父、徳田六郎の場合はもうちょっとちがっていた。

国際連盟事務局の仕事を断念して、いっさいの外部との関係を切り、聖書だけを友として生きていた徳田は、一九四一年九月上旬、思いもよらぬ治安維持法違反の容疑で検挙された。日曜日はいかなる場合でも安息日を守り、偶像礼拝を拒否すること、つまり「皇居遙拝」や「ご真影礼拝」を避けてきたことなどがたたったのであろう。あるいはスパイの容疑をかけられたかとも思われる。もちろん、事件にすべきタネすらなかった。それでも翌年六月まで中野署に留置されていた。

徳田はここで、朝鮮人の鄭（法大生）・李一東（日大生）・姜（コミュニスト）、中国人の黄（日大生）などと会っている。この中の黄は、長身で、極度の近眼、あるいはこれが中垣虎児郎検挙の発端になった黄一環ではあるまいかと徳田は思っている。しかし、どうやら人ちがいであろう。三七年六月から四一年九月までというのは、いささか長すぎる留置期間であるからだ。

こうした一連の霧田（あ）気の中で、もう少し意識的な動きがあった。それはインガ・オサム（本人の書くとおりにするところなる。戸籍名では石賀修）の点呼拒否が起こった。しかしその前にもうひとつの事件、三・一事件で知られる朝鮮独立運動の叫びの中にうずもれている事件のことを語らねばならない。

大空詩人の過去——永井叔のこと

永井叔（あ）といっても知る人は少ないであろう。しかし大空詩人といえ、東京の人ならば、「ああ、あれか」と思い起こす人がずいぶんとあるはずだ。マンドリンをかかえて、肩からタスキをかけて「グランドン チェーロン」とか何とか書いて、町まちを流していた顔中ヒゲだらけの老音楽家。この「グランドン チェーロン」が「大空を」というエスベラントである。

この大空詩人が社会主義とキリスト教とを基盤にした、いわば人間本来の姿である平和主義思想から一九一九年三月一日、朝鮮をおおい尽くした独立運動の波の中で、竜山歩兵七八連隊で銃剣を引き抜いて上官に反抗したのであった。

永井の書いた『緑光土』という、おそらく自身で原紙を切った謄写印刷の本、それを活版にして同成社から発行した『大空詩人』という本をくりかえし読んでみても、著者があまりにも詩人すぎるためか、霧田気だけは軍隊生活の経験を持つ筆者にはかろうじてわかるのであるが、もうひとつピンと来ない。この上官反抗の部分に、永井と編集者の対話をつけ加えて発表した雑誌『朝鮮研究』を讀んでみて、どうやら凡人のわれわれにも事件の一斑がわかってくる。

一九一八年十二月、朝鮮竜山の連隊へ入営した永井は、空想的社会主義とも言える思想を持っていて、青山学院や同志社を追放されたのであるが、この竜山で朝鮮独立を叫んで全土に決起した三・一

事件に出くわした。そして「朝鮮同胞への愛情を胸一ぱいにもちながら、いやいや、『暴動鎮圧』にもいった——ひきいられて」と書いているが、『朝鮮研究』の記者に答えて「わたしはもともと日本のあり方と相入れない考え方があったところに、実際朝鮮に行ってみて、立派な国があるのに、それを日本が侵略しているんですよ。国泥棒ですね。そういうことにまず反感をもっていたことと、当時の軍隊制度への反感、ついでに監獄をみてやるうという気分がミックスされて」事件を起こしたのであった。

「私はそのある日の午前、山田軍医に頭が痛むと申し出て診察を乞い、一人ノコノコと自分の隊へ帰って行った。そして二階なる自分の班へ入るなり、シロリと中の古兵たちを見渡した。

ちやうど昼飯時だったので、みんながガヤガヤと騒ぎあっていたが、Kが、私を見るなり、

『おい、永井、貴様、さぼっていやがる……』

そういいかかった時には、もう、すでに私の右手にはアルミの箸が、さかてに握りしめられていた。……」

そして敵寒の歳末も近くになった日、永井はついに銃剣をひきぬく。兵器使用、上官反抗は軍隊内の重罪である。

そして営倉入り。一月二十七日には軍法会議で、弁護士ぬきの法廷へ武装兵に護送される。禁錮二年、上官侮辱、兵器使用上官暴抗・哨例違反。

玄海灘を越えて「第三三号」と名を変えて送られた。

この永井がエスベランチストになるのは、さらに後のことである。

奇人、変人、……その他なんでも言えようが、町を流して歩く「大空詩人」の過去にこうした歴史を、日本帝国主義の大陸侵略へのきわめて小さい抵抗の歴史を秘めていることを書きとめておく。もっとも永井のその後については、反感を持つことも多いのである。前記の著書『大空詩人』のトッポに入れた写真が、「菅野和太郎氏（元国務相）と大空詩人」ときているのは、鼻につくのもいいところ。人間は長生きすべきものではない。

兵役拒否→転向——イシガ・オサムのこと

「本籍岡山県真庭郡川上村東芳部七六三、住所福岡市平尾八九六、翻訳業 石賀修（当四十三年）は、小倉中学、福岡高校を経て、昭和四年三月、東大文学部西洋史学科を卒業、引続き大学院において原始キリスト教の研究をなしたるほか、キリスト教信者たる父母の下に養育せられ幼時よりこれに感染していたるのみならず、東大卒業後、英京ロンドン所在キリスト教戦争反対者インターナショナル（または第三戦争反対者インターナショナル）に加盟して、同団体より多数の反戦・平和主義的文書の送付を受け、これを耽読したることある等のため、極端なる反戦思想を抱持するにいたれるもののごとく、本年八月二日本籍地において簡閲点呼執行の通知を受けて帰郷したるも（本名は第二国民兵）、かねて『世界を支配したまう神は一にして、人類はその本姿においてすべて神の子たる兄弟である。この兄弟がたとえ敵とはいえ血を流しあうことは大なる罪悪であるから、戦争行為は

絶対反対である』との反戦的信念を抱く本名は、点呼の執行日に先だち、岡山憲兵分隊に自ら出頭し、『点呼は戦争の前提であつて、これに参加することは戦争行為への介入である。ゆえに自分は断乎これに参ぜざる決心である。かくのごとき行為が国法に反することは十分承知しているが、自分の信念に忠実でありたい。処罰はもとより覚悟していると、銃殺されるも不服はない』と申出たるやにて、同憲兵隊においてはこれを極秘のうちに検挙取調の中もようなり⁽⁵⁾」

内務官僚特有のややこしい言い回しのうち「本名」とあるのは「偽名」に対するものではなく「本人」ということであり、「第三戦争反対者インターナショナル」なるものは「戦争抵抗者インターナショナル」(略してW・R・I)に、「第三インター」すなわちコミンテルをむりにくつつけた誤解の産物であることだけを注意すると、このままでわかるだろう。

この事件についてはインガその人が一九六六年三月号の『文芸春秋』に、またその著書『神の平和——兵役拒否をこえて』⁽⁶⁾に書いている。

「祖母から母を経て伝えられたキリスト教と、第一次世界大戦後の平和的風潮との中に育てられたわたしは、ごく自然に平和主義を受け入れていた……」

山本宣治代議士が右翼団員に刺殺されたのは、わたしの東大受験の月であったが、たまたまわたしの宿舎はその遺骸が最後の一夜を明かした場所であったことを何か誇らしく思うくらいに、かれとその行動には親しみをよせていた。

入学の月におこった四・一六の検挙は視野に入らなかつたが、プロレタリア芸術運動のもりあがりや地下運動のはげしさはわたしの目にもとまった。クラスの者や高校の同窓が集れば、つかまつた級友のうわさとカンパの相談。読書会に出てこい、会合にへやを貸せ、シンパに加わってくれ。わたしは唯物史観にはなじめなかつたので、運動には加わらなかつたが、弾圧に対する反発や右翼・軍部に対する反感は人なみにわけ持っていた。

だから九月十八日の柳条溝事件が満州事変となり、砲声のもとに新聞雑誌の追隨が始まると、その反感はいよいよ強められた。

……
わたしは手が動かせるようになると、病床の余暇を利用してエスペラント通信を積極的に始めた。エスペラントと平和主義・国際主義は切りはなせない関係にあつたから、エスペラントの文通では『平和』のことばがはばかりなく使えた。……

以前から耳にはしていたが、実際に知ることのなかつた戦争拒否者たちを結ぶW・R・Iのパンフレットからは特に強烈な印象をうけた。

「戦争は人道に反する罪悪である。したがってわれわれはいかなる戦争をも支持せず、戦争のあらゆる原因を除去するために努力することを決意する」

という宣言は、兵役拒否をふくむ各種の戦争非協力を意味しており、機関誌には毎号、各国の兵役拒否者の入獄と、その救援活動の記事がのつていた。賀川豊彦とか高良とみという親しい名前もそこに見えていた。⁽⁷⁾

イシガは若干のためらいを持ちながらも、この組織に三四年の春ごろ加盟した。「その七月に受取った協力者の名簿にあった日本人の名はわずかに二十六」であった。

一九二一年に創立されたこの組織は、キリスト者と少数のアナキストを中心としており、本部をイギリスにおき、二七か国にその組織を持っていた。エスペラントを採用したのは創立以来からで、*La Militreŝtano* とどうエスペラント文の機関紙を発行していた。(戦後日本でこの組織を再建したのは、山鹿泰治を中心としたアナキストたちで、つい先年あたりまで原爆反対の全国行進に加わっていた) イシガはまたキリスト教非戦主義の団体、友和会⁽⁸⁾にもはいっていた。

二・二六事件の年、イシガは「製鉄所につとめていた父が停年退職すると、その退職金の一部をもらってラーゲルレーヴ女史の『ベツレヘムのおさなご』という物語をエスペラントからローマ字にうつして自費出版した。軍需産業で得た金だから、平和の物語に費すのは罪はろぼしにもなる——そんなこともひそかに思っていた。平和の君をにくむローマの兵士がついに幼子キリストの前にひざまづくこの物語はもう漢字まじりでは出版がむづかしかつたかも知れない」と書いている。このノーベル賞作家の短編は、戦後同じイシガが訳した『キリスト伝説集』(岩波文庫)に漢字まじり文で収められているが、この翻訳は同じ著者の大作『エルサレム』の仕事につながっていた。イシガはスエーデンのエスペランティストの力を借りてスエーデン語を一年一〇か月間独習した。よくは知らぬが、北欧文学者である尾崎義・山室静・万沢まき、それに知りすぎているチェコ語の栗栖継の勉強もこうした形であったのだろう。それから二年半かかって、スエーデン・エスペラントの辞書をたよりに、この

岩波文庫で星八つの大作の翻訳を完了したのであった。

イシガは「侵略戦争のための国防献金をせず、愛国行進曲も歌わず、わずかな小づかいをさいてスベイン内乱の避難児童のためにW・R・Iが開いたキャンプのために送金し、またW・R・Iがコロンビアに開いた拒否者のコロニーのために協力しようとした」。

そして「四二年の末に『エルサレム』第一部の出版を見ると、十年来親のすねをかじって来たわたしは、いまの時局にこれが出されたことをほんとに神の恵みと感ずるとともに、この恵みをいたすらに受けることなく、神の前に正しい歩みを取らなくてはならないと決意をあらたにした。それは当然召集拒否を意味していた。……召集に先立つ点呼から拒否するほうが主義に忠実だという見方もできた。反枢軸軍の優勢に力づけられたことも事実だった。……」

七月三十一日の夜「岡山の旅館で原稿の最後の見直しを終り、八月一日の午前に郵便局から原稿を書店あてに送り出すと同時に、点呼地の村役場にあてて点呼不参のむねを電報し、発信人の場所は憲兵隊気付とした。そして手荷物をしまつし、床屋で丸刈りにしたあと、奉公袋ひとつを持って憲兵隊へ自首した」のである。

「アスハマイレヌ オカヤマケンペイタイキツケ イシガ」の電報はすでにこちらへ回っていた。

いや、引用をやめて簡略化すると、イシガは憲兵隊で治安維持法違反の容疑者などには見当もつかない寛大さで取調べられる。これには、かれが東大出の文学士であり、病身であり、自首したことなどが影響している。(これよりだいたい前に太宰治も自首して治安維持法違反をまけてもらった不起诉になった)。かれの場合は党員でもあったし家屋資金局の活動家でもあったのだが。イシガは

ここでW・R・Iや、同じようなキリスト者の平和運動組織である友和会⁽⁹⁾についても聞かれる。一部は隠したが、その大部分についてはしゃべったらしい。

「十月のなかばになって東京の憲兵隊本部から来たT少佐とM大尉の審問があった。

『だいぶん考えがかわったそうだが、どうだ、戦争に行くか』とT少佐がきいた。

『ハイ、参ります』

『平和主義者が戦争に行くか』

『今では平和主義者ではありません』

『平和主義者でない？ 戦争は罪悪だと言っていたじゃないか』

『考えが足りませんでした。今では戦争は罪悪だとは思っていません』

『こりゃ百八十度の転向だな。なぜ戦争は罪悪ではないんだね？』

『平和そのものが善でないと同じく、戦争そのものも罪悪ではありません。むしろ人間の罪の結果が戦争としてあらわれるのだと思います。戦争もやはり神の摂理だと思えます』

『ワッハッハ、こりゃ新学説だね。わしにはそんな坊主くさいことはわからんよ。罪悪でいいじゃないか、な、罪悪で』

M大尉も皮肉まじりに言った。『神を信じるということは苦しいことだね』

『ハイ、そうです』

と真正面から答えると、まぶたがうるんだ。大尉もそれに気づいたか、ちょっと態度がかわっ

た。』

そして十月十七日、東京憲兵隊麹町分隊留置場へ。十一月のある日、友和会の代表者と面会させられる。以前に日本キリスト教団の代表者であった牧師、クエーカーの某氏、それにインガを友和会に入れたW女史ら。見おぼえがあるかと聞かれて、W女史は答えた。

「見おぼえありませんね。ずいぶん前のことですね」

ああ、「我その人を知らず」と答えたベトロを地で行くキリスト教界の名士たち！

賀川豊彦も来ていた。この「死線を越えて」労働者や農民の間へはいついっていき、川崎・三菱の大争議を指導し、全国農民組合を創立したキリスト者も、何日かのブタ箱生活で転向して、他日戦犯と指定される道を歩み出そうとしていた。

「しかし、賀川氏が聖書を引いて兵役のことを持ち出すとわたしはいそいでささぎって言った。

『もうそのことはきまりました。兵役には行きます』

自分がすでに平和主義者としての志を失っているのに、今さら賀川氏に聖書を持ち出してそれをすすめられたり、裏書きされたりするのはたえられなかった」

そしてインガはこの年の十二月三日、罰金五十円の判決を受けて釈放された。阿部知二の本は「良心的兵役拒否が、罰金でいわば認められたところの稀有の例だったといえよう」と書いているが、す

こぶる甘い、甘い、甘い、あまりにも甘すぎる見方である。インガの転向をヌキにしてこんな判決は考えられない。第一、「良心的兵役拒否」そのものが、インガ自身が認めているように挫折^{せき}しているのであった。

インガの転向はどこから来たのか。第一には留置場生活である。インガ自身はこのことを認めたがらぬもようであるが——ここに自己批判の欠落がありそうだ——。松田道雄だかが書いていたように、「転向」とはしよせん物理的現象である。第二に、そのよりどころとするキリスト教平和主義そのものの問題である。これは共産主義者の転向の場合も同じであるが、インガがたよるところの内村鑑三の不徹底な平和主義である。非戦論者のキリスト者が召集された場合どうすればいいか、との問に答えて内村は書いている。

「逝けよ、両国の平和主義者よ、行いて他人の冒さざる危険を冒せよ。行いて、汝らの忌み嫌う所の戦争の犠牲となりてたおれよ。戦うも、敵を憎むなかれ、そは敵なるものは今は汝になければなり。ただ汝の命ぜられし職分をつくし、汝の死の、贖罪の死たらんことを願えよ。人は汝を死においやりしも神は天にありて汝を待ちつつあり。そこに、敵人と手を握れよ。ただ死にいたるまで平和の祈願を汝の口より絶つなかれ……」⁽¹⁰⁾

これでは広島原爆攻撃に出かける飛行士を祝福する牧師と五十歩百歩の差すらもないのである。おれの体質は特別だからと自らは酒を飲んだ禁酒論者内村のインチキぶりは、キリスト教の腐敗をまさまざと見せたものである。かつて羽仁もと子の子の国防献金を笑い、佐野・鍋山の転向で共産党への信頼

を失ったインガの転向は不可避であった。いや転向とは他人のせいにするべき性質のものではなく、インガその人の敗北にあったのだ。「佐野や鍋山さえも」というのが共産党転向者の後めたさをとりつくるうものであったのと同じく、内村や、おそらくインガの直接の師とも言うべき矢内原忠雄の不徹底⁽¹¹⁾さも、かれにとつては、格好のかくれミノになったのかも知れぬ。

汝らのうち罪なきもの石をもて打て。筆者たちにインガ・賀川その他を責める資格はない。事実を書いて自己批判するだけである。

留置場を出たインガは、同情者である長谷川という人の家に引きとられ、やっかいになった。その当りか翌日かに三宅史平を日本エスペラント学会にたずねている。三宅はこのことにふれて、一九四三年というのはインガの記憶ちがいで、三九年、もしくは三八年のことだと書いているが、これが三宅その人の思いちがいであることは、はじめに引用した『特高月報』の記事で明白である。

福岡へ帰ったインガは一年ほど女子商業の教師をしたあと、鹿児島鹿屋のライ療養所、星塚敬愛園へおもむいた。背教の身を恥じて、一身をライ療養所へ埋めようとしたのであった。そこへ召集令状が来た。かれはもはや自分の力の限界を知っていて、素直に出頭した。福岡の西方二〇キロの村に駐屯する靖第一九五〇〇部隊千歳三二六二三部隊加藤隊という通信隊で衛生兵になった。そして二〇日で敗戦、枕崎台風のあとの九月十八日に召集解除になった。

平和が回復されると、インガは戦争抵抗者インタナショナルに手紙を書いた。その宣言に忠実であり得なかったことを書いて、退会を申出たのであった。

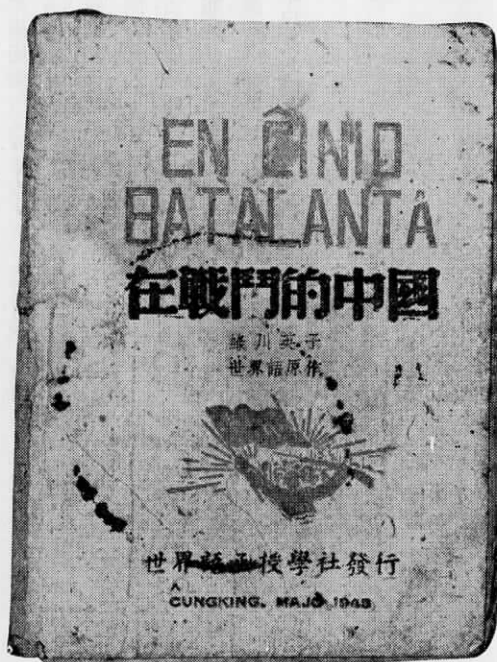
「いつか折があったら、もっとくわしくエスペラント関係のことなど書いておきたいと思つていま

す。⁽¹⁴⁾英語では平和を語り得ない時代がまた来そうないがしておりますから」とは、インガが三宅史平へ送った手紙である。

「反戦的流言」のかどで金沢憲兵隊に検挙された松田周次の事件もこの時代のことであった。たしか執行猶予になったはずである。同氏の夫人久子もエスペランティストで、東京で在学中は学生運動の闘士であった。

注

- 1 松葉菊延「七人の隠密にかこまれて」Nova Rondo 第一三号 一九六九年七月。
- 2 川崎ナオカズ「一九三八年のある事件」Nova Rondo 第二二号 一九六九年四月。
- 3 野島安太郎「Tempo Sur」La Movado 一九七一年二月号—七二年一月号。
- 4 永井叔「大空詩人」一九七〇年 同成社（十数年前の謄写印刷の私家版あり）。「反戦のための闘争開始」『朝鮮研究』一九六九年三月号 日本朝鮮研究所。
- 5 内務省警保局保安課「特高月報 昭和十八年十月分」一九四三年。復刻版 一九七三年 政経出版社。
- 6 インガ・オサム『神の平和』一九七一年 新教出版社。
- 7 インガ・オサム「憲兵と兵役拒否の間」『文芸春秋』一九六六年三月号 文芸春秋社。
- 8 この団体については、日本友和会『良心的兵役拒否』一九六七年 新教出版社、阿部知二『良心的兵役拒否の思想』一九六九年 岩波書店。
- 9 7と同じ。
- 10 内村鑑三『非戦主義者の戦死』一九〇四年。ただしここでは阿部知二の前掲書より。
- 11 阿部知二 前掲書。
- 12 三宅史平「石賀修さんに」『La Revue Orienta 一九六六年七月号』。



長谷川テルの著書『戦う中国で』（1945年、重慶で発行）